

看護学生におけるエイジズムと高齢者の 援助に対する思い

田 渡 あづさ

はじめに

我が国の高齢化率は、平成 19 年に 21.5% に達し¹⁾、超高齢社会となった今、一口に高齢者といってもその実態は多様化している。多くの健康な高齢者が様々な場で生き生きと活躍する姿を見る機会も多い。一方で認知症、高齢者医療の問題そして介護保険など、高齢化に伴う諸問題も毎日のようにメディアから発信されている。寝たきりや認知症の高齢者とその家族の介護の実態、高齢化率の上昇に伴う保険・医療制度などの危機などに関する報道は事実であるが、全ての高齢者が深刻な状況に至るような偏った印象にもつながる。このような高齢者に対する否定的な視点は、高齢者差別(エイジズム)を生む温床となる²⁾。

『エイジズム』とは、Butler によって初めて提唱された「高齢者を高齢者であるという理由で系統的に類型化し、差別する過程」と定義された概念である³⁾。Palmore は、エイジズムの基本形態を否定的偏見、否定的差別、肯定的偏見、肯定的差別に分類し、高齢者の偏見としては否定的固定観念、否定的態度、肯定的固定観念、肯定的態度の 4 つがあり、これらの諸形態が個人的・制度的な差別につながるとした。日本においてエイジズムは、「高齢者差別」と表現され、高齢者に対する偏見やステレオタイプな見方とされている。

今日の社会環境では、看護学生においてもメディア等によって高齢者に関する多くの情報にさらされることにより、エイジズムの影響を受ける可能性がある。老年看護学では高齢者の身体的・心理的・社会的な特徴を理解し、高齢者の看護を学ぶことを目的として講義・実習などを展開している。看護学生による高齢者のイメージや高齢者観については、老年看護学での学びや看護実践に影響するものとして、これまでも数々の研究が行われてきた。看護学生を対象とした老年看護学の学習過程における高齢者イメージの変化については、Semantic Differential Method (SD 法)、老人イメージマップ法、形容詞対や実習中の援助項目等を用いた質問紙調査、学生の記録やレポートのカテゴリ等によって比較しており、学習過程の進捗に伴い高齢者イメージは否定的から肯定的イメージに変化すること、あるいは高齢者観が次第に広がりや深まりを増すこと等を基に、学習過程との関連を示唆した^{4)~14)}。また小川は、加齢に対する態度を間接的にはかる尺度である The Fact on Aging Quiz (FAQ) という『加齢の事実についてのクイズ』を用いて看護学生の縦断的なエイジズムの変化について調査し、1 年生より 3 年生の方が否定的偏見を持つ

表1. 事例と設問

| |
|--|
| <p>－事例－</p> <p>3世代が一緒に暮らしている家族の中の一人である「彼女」はしゃべることも、話を理解することもできません。しかし時々、何時間もとりとめもなく片言で話し続けます。「彼女」は、人や時間、場所などはわかりませんが、自分の名は認識しているようでした。歯がないので食べ物は流動食か半流動食で、食べることも入浴や着替えも、他人に頼りきりです。しかも、尿も大便もおむつでしたから、着替えや入浴を頻繁に行わなければなりません。「彼女」のシャツにはよだれがついていて、歩けません。睡眠も不規則ですから、夜中に大きな声をあげて周りの者を起こしました。</p> <p>(出典:『あるがまま行く』, 日野原重明著, 朝日新聞社, 139-140, 2005)</p> |
| <p>－設問－</p> <p>1. この事例から推察して「彼女」のおおよその年齢をお書き下さい。</p> <p>2. あなたは「彼女」の世話をすることをどう感じますか。率直な気持ちをお書き下さい。</p> |

と報告した¹⁵⁾。

今回、看護学生に一つの事例を提示し、それに対する設問の回答から、高齢者や援助に関する率直な思いを直接的に把握することができた。その内容から看護学生のエイジズムの実態について捉えるとともに、高齢者の援助に関する学生の育成に向けた老年看護学の教育展開を考える機会とした。

I. 目 的

本研究では、看護学生の持つ高齢者やその援助に対する思いを分析し、エイジズムの実態を捉えるとともに、援助に対する率直な思いから援助行動への意識を明らかにする。さらに、高齢者の援助に関する学生の育成に向けた老年看護学の教育展開を考える。

II. 研 究 方 法

1. 対象

研究への協力を依頼した対象は、4年制大学看護学科に所属する1年生80名。そのうち、データを研究的に利用することに同意を得ることができた78名を研究対象とした。

2. 調査期間

2007年12月4日～2007年12月11日

3. 調査方法と倫理的配慮

老年看護学概論の講義で、「彼女」の状況について記載した1事例とそれに関する設問(表1参

照)を質問紙として学生に配布した。倫理的配慮として、回答は無記名で封筒に入れて一週間後までに提出することとした。さらに研究協力については、研究的にデータを用いること、協力の有無によって学習評価に影響しないことについて文書と口頭にて説明し、同意を得られた学生の回答のみを今回のデータとした。

設問に対する回答について、類似性に基づいて分類し質的帰納的方法で分析した。

III. 結 果

1. 対象者の背景

4年制大学の看護学科1年生80名中、研究の趣旨に同意した78名を対象とし、有効回答を得られた76名のデータを分析した。

高齢者との同居経験を有する学生は47名(61.8%)であり、そのうち現在高齢者と同居中の学生は30名(39.5%)、過去に同居経験のある者は17名(22.4%)であった。また、高齢者との同居経験のない学生は28名(36.8%)であった。高齢者との同居年数について、同居経験のある学生47名のうち35名が“15年以上”と回答し、次いで“10年以上15年未満”が8名、“5年以上10年未満”および“5年未満”がそれぞれ2名であった(表2)。

“あなたには、人生の先輩として尊敬できる高齢者の方はいますか”の問いについて、55名(72.4%)が“いる”と回答し、“いない”は3名(3.9%)、“どちらでもない”が18名(23.7%)であった(表3)。

2. 提示した事例の「彼女」の推察年齢

「彼女」を乳児期と推察した学生は6名、乳児期または老年期との回答は2名であり、その他の68名は高齢者または60歳代以上と回答した。最も回答者が多かった年代は80歳代で34名、次いで90歳代の19名、70歳代の11名という結果であった。

今回提示した事例をこれまでに読んだことのある学生4名のうち、2名が「彼女」を乳児期、1

表2. 高齢者との同居経験
(単位: 人, $n=76$, 同居経験に関する質問に未回答1名を含む)

| 同居年数 | 同居経験あり | | | 同居経験なし |
|------------|------------|------------|------------|------------|
| | 現在同居中 | 過去に同居経験あり | 計 | |
| 5年未満 | 0 (0%) | 2 (2.6%) | 2 (2.6%) | — |
| 5年以上10年未満 | 1 (1.3%) | 1 (1.3%) | 2 (2.6%) | — |
| 10年以上15年未満 | 3 (3.9%) | 5 (6.6%) | 8 (10.5%) | — |
| 15年以上 | 26 (34.2%) | 9 (11.8%) | 35 (46.1%) | — |
| 計 | 30 (39.5%) | 17 (22.4%) | 47 (61.8%) | 28 (36.8%) |

表3. 人生の先輩として尊敬できる高齢者の存在

| 項 目 | 人数 | % |
|--------------|----|-------|
| 尊敬できる高齢者がいる | 55 | 72.4% |
| 尊敬できる高齢者がいない | 3 | 3.9% |
| どちらでもない | 18 | 23.7% |
| 計 | 76 | |

表4. 「彼女」の推察年齢

| 推察年齢 | 人数 |
|----------------|----|
| 0～1 歳 | 6 |
| 0 歳または 80～90 歳 | 2 |
| 60 歳代 | 2 |
| 70 歳代 | 11 |
| 80 歳代 | 34 |
| 90 歳代 | 19 |
| 100 歳代 | 1 |
| 高齢者 | 1 |
| 計 | 76 |

名が乳児期または老年期、そして1名は100歳代と回答した(表4)。

3. 「彼女」の世話に対する気持ち

1) 学生の「彼女」の世話に対する気持ち

“あなたは「彼女」の世話をするをどう感じますか。率直な気持ちをお書き下さい”という設問への解答を1名分ずつ要約し、類似性に基づいて分類した。

「彼女」の世話について《援助したい》,《(条件付きで)援助したい》というカテゴリに分類された自分が援助することに肯定的な回答は30名(39.5%),《(世話をするのは)大変》,《あまり世話をしたくない》などのカテゴリに分類したように、自分が援助することに否定的な回答が32名(42.1%)あった。また、援助したい思いと否定的な思いが交錯している学生が8名(10.5%)あった。「彼女」を乳幼児期と推察した学生6名のうち、5名(6.6%)は、乳幼児だから世話をするのはあたり前とする回答であり、1名(1.3%)は乳幼児であっても言うことを聞かなければイライラすると回答した(表5)。

2) 自分が援助したいと考える学生の回答

自分が「彼女」のお世話をしたいとする30名(39.5%)の回答の中で、カテゴリ《援助したい》に分類されたサブカテゴリとしては、〈援助したい〉,〈懸命に援助したい〉,〈彼女の生を意義あるものにしたい〉,〈負担はあるが援助したい〉,などが抽出された。《(条件付きで)援助したい》のサブカテゴリには、“家族だから”,“大切な人だから”,“親なら”,“母なら”という条件付が付いた(表6-1)。

3) 援助の大変さや援助したくないなど考える学生の回答

「彼女」の世話に対する否定的な回答32名(42.1%)分から抽出したカテゴリとして最も多い15名の回答は《世話をするのは大変》,次いで8名が《あまり世話をしたくない》,その他《最初は援助可能だが時間の経過とともに苦になる》,《施設入所させることを考える》,《生きている意味が分からない》,《かわいそう》などに分類された(表6-2)。

表 5. 「彼女」の世話についての気持ちと人数

| 世話についての気持ち | 人数 | % |
|--------------------------|----|-------|
| 援助したい | 9 | 11.8% |
| (条件付きで)援助したい | 21 | 27.6% |
| 世話をするのは大変 | 15 | 19.7% |
| あまり世話をしたくない | 8 | 10.5% |
| 最初は可能だが時間の経過とともに苦になる | 3 | 3.9% |
| 施設入所させることを考える | 3 | 3.9% |
| 生きている意味が分からない | 2 | 2.6% |
| かわいそう | 1 | 1.3% |
| 援助したいきもちと、他の気持ちが交錯 | 8 | 10.5% |
| 乳児だからあたりまえ | 5 | 6.6% |
| 乳児であっても言うことを聞かなければイライラする | 1 | 1.3% |
| 計 | 76 | |

表 6-1. 「彼女」の世話に対する気持ち…

自分が援助したいと考える学生の回答 (回答者数: 30 名 39.5%)

| カテゴリ | サブカテゴリ |
|--------------|--|
| 援助したい | 援助をしたい 頑張って援助したい 懸命に援助する 彼女の生を意義あるものにしたい 負担はあるが援助したい 話しかけたい(援助方法を工夫しながら) 周囲の協力を得ながら援助をしていく |
| (条件付きで)援助したい | 大変なことも多いが、彼女のことを理解したい できる限り援助したいが、意思疎通ができないとケアの意味を見失いそう 意思疎通を図るのは大変だが、看護技術を活用して援助したい できるだけ援助したいが、できれば汚い仕事はしたくない 根気強く援助すればいつか慣れる 家族だから援助をするのは当然 身内なら世話は義務 身内だから世話をする 大切な人なら援助する 家族だからできる限りの援助をしたい 家族だから世話をしなければならぬが、家族の状態を考慮して施設入所も考える 母なら援助したい 親なら、援助したい 家族なら、社会資源の活用も考えて援助したい 運命だから援助したい ADL がアップするなら援助する 面倒だけど援助したい 家族だから見殺しにできないから、仕方なく世話をする |

表6-2. 「彼女」の世話に対する気持ち…

援助の大変さや援助したくないなど考える学生の回答（回答者数：32名 42.1%）

| カテゴリ | サブカテゴリ |
|-----------------------|---|
| 世話をするのは大変 | 大変そう 意思の疎通が図れないのが大変 自分の時間がないのが大変 世話の継続がストレスで倒れたりする大変さ 24時間の援助が大変 ストレスで心身の疲労があり大変 手間やお金がかかって大変 |
| あまり世話をしたくない | 短期間なら世話をするのは可能 正直あまり世話をしたくない 世話をするのは嫌だ 大変であまり援助したくない 自分の時間がないからあまり世話をしたくない 最初は仕方がないが継続するのは嫌だ 年齢と無関係に続けば嫌だ |
| 最初は可能だが、時間の経過とともに苦になる | 最初は援助可能だが次第に面倒になる 最初は援助可能だが、嫌になり周囲にあたる 最初は援助可能だが、つらくなる |
| 施設入所させることを考える | 状況を考えて施設へ預けたい 家族のことを考えて施設入所を考える |
| 生きている意味が分からない | かわいそうで生きている意味があるのかと思う 生きている意味が分からなくなり、放置したくなる |
| かわいそう | おむつ交換は仕方がないがかわいそう |

4. 援助に対する否定的な気持ちの記載に多く使用された語とその修飾語句

援助の大変さや援助したくないなど考える学生の回答に見られた否定的な気持ちに多く用いられた語句は、【つらい】、【大変】、【疲れる】、【ストレスが溜まる】、【面倒になる】、【悲しい気持ちになる】、【負担】、【嫌になる】の8語句であった（表7）。これらの語句を修飾する語句をカテゴリ化したものが表8である。修飾語句のカテゴリとして抽出できたのは、《毎日1日中世話をすること》、《夜間の援助に伴う援助者の睡眠時間減少》、《相互理解の不足》、《援助が長期化》、《全介助を要する状態》、《援助者の自由時間の喪失》、《世話をすること》、《一人での援助》、《援助者の生活時間の確保》、《「彼女」の汚い感じ》であり、これらのうち《一人での援助》、《援助者の生活時間の確保》、《「彼女」の汚い感じ》を除くカテゴリは、前述の否定的な気持ちの記載に用いられた8語句について、複数の語句に共通して修飾をしていた。

表 7. 援助に対する否定的語句と修飾する語句のカテゴリ

| 否定的語句 | 修飾語句のカテゴリ |
|---------------|---|
| つらい | 夜間の援助に伴う、援助者の睡眠時間減少 相互理解の不足 援助の長期化 毎日1日中世話をする |
| 大変 | 相互理解の不足 夜間の援助に伴う、援助者の睡眠時間減少 毎日1日中世話をする 援助者の自由な時間の喪失 全介助を要する状態 |
| 疲れる | 夜間の援助に伴う、援助者の睡眠時間減少 毎日1日中世話をする 世話をする 1人での援助 全介助を要する状態 |
| ストレスが溜る | 援助の長期化 毎日1日中世話をする |
| 面倒になる | 援助の長期化 援助者の生活時間の確保 |
| 悲しい 気持ちになる | 援助の長期化 相互理解の不足 |
| 負担 | 夜間の援助に伴う、援助者の睡眠時間減少 全介助を要する状態 |
| 嫌になる | 援助者の自由な時間の喪失 世話をする 「彼女」の汚い感じ |

表 8. 修飾語句のカテゴリ化

| カテゴリ | 修飾語句 |
|-----------------------------|--|
| 毎日1日中 世話をする | 毎日世話をする 1日中世話をする ずっと付き添う 24時間世話をする |
| 夜間の援助に伴う、 援助者の 睡眠時間減少 | 昼夜関係なく世話をする 夜中の世話 睡眠を削られる |
| 相互理解の不足 | 自分のことを理解してもらえない 話を理解できない コミュニケーションをとりづらい 自分の気持ちが伝わらない |
| 援助の長期化 | 時間が経つと… ずっとやっている… |
| 全介助を要する状態 | 全てにおいて介助が必要 あらゆる部分の世話をする ほとんど介助が必要 |
| 援助者の 自由な時間の喪失 | 自分の時間が無い 自分の時間が無くなる |
| 世話をする | 世話をする |
| 1人での援助 | 自分を理解してくれる人がいない 自分だけで世話をする 家族の協力が無い |
| 援助者の生活時間 の確保 | 自分の生活があるから |
| 「彼女」の汚い感じ | 汚い 汚い感じ |

IV. 考 察

1. 事例と高齢者イメージ

本研究では、看護学生を持つ高齢者やその援助に対する思いを分析し、エイジズムの実態を捉えるとともに、援助に対する率直な思いから援助行動への意識を明らかにする。さらに、高齢者の援助に関する学生の育成に向けた老年看護学の教育展開を考えることを目的とした。

今回の設問に用いた事例における「彼女」は、実際には“生後6カ月の赤ちゃん”である。しかしほとんどの学生は高齢者と推察していた。これは事例を老年看護学の講義中に提示したことに関与するところが大きいであろう。さらに、事例の文章の表現で高齢者を思わせたと推察できる部分について考えよう。“人や時間、場所などはわかりません”、“何時間もとりとめもなく片言で話し続けます”、“食べることも入浴や着替えも、他人に頼りきり”、“食べ物は流動食か半流動食”、“夜中に大きな声をあげて周りの者を起こしました”、“尿も大便もおむつでした”、“歩けませんでし

た” これらは、認知症高齢者の症状や状況、あるいは入院中の環境変化に伴う不穏状態や、身体可動性障害等のある高齢者などを想起させる。また、“「彼女」はしゃべることも、話を理解することもできません”という状態は、疾病の後遺症によってコミュニケーション障害を有する高齢者のイメージではないか。加えてコミュニケーションを円滑に図れない状況は、学生にとって対象とのかかわり方を考える上で大きな問題となりうることから、事例中の「彼女」の状態や世話が一層困難に感じられたに違いない。

エイジズムの否定的固定観念として、病氣、性的不能、醜さ、精神的衰え、精神病、役立たず孤立、貧困、鬱などがあるが³⁾、事例からは病氣、精神的衰え、精神病、役立たずに通じる印象を持ったと考える。

2. 自ら高齢者の世話をしたいと考える学生

全体の39.5%の学生は、「彼女」である高齢者の援助を自分が実施したいと回答した。援助したいという気持ちを表現した学生の他に、親族等の大切な人ならば援助したいなど、何らかの条件付きで援助したいとする学生が多くみられた。

高木は、援助行動（向社会的行動）とは、他者が身体的に、また心理的に幸せになることを願い、ある程度の自己責任を覚悟し、人から指示、命令されたからではなく、自ら進んで（自由意志から）、意図的に他者に恩恵を与える行動であると定義し、数種類の援助行動類型を明示した¹⁶⁾。その一つに、援助者が援助規範を内在化し援助に伴う責任を積極的に受容でき、実行する能力を備えている、または援助的性格を有し困っている他者に関心を向けやすい感情状態と助けたいと思わせる他者に対して援助行動を起こす『援助寄付・奉仕行動類型』がある。これは看護倫理の実践的な概念である、ある状況下で看護者がその事態に責任を感じ、勇気をもってその事態にかかわる行為¹⁷⁾につながる行動と言える。積極的に世話をしたいとする学生は、基本的に援助的性格を持っている可能性がある。さらに、高木は援助的性格だけではなく援助者が被援助者との間に既に親しい関係、あるいは親しい関係の成立が期待されるときに起こりやすいとして、『分与・貸与行動類型』、『労力を必要とする援助行動類型』などを示した。家族や大切な人であればという条件付きで援助したい学生は、こういった援助行動類型を有しているのではないか。いずれにしても、看護者として成長していく過程において、好ましい援助行動類型を持っているといえる。

3. 高齢者の援助に抵抗感を持つ学生

「彼女」である高齢者の世話について、援助の大変さや援助をしたくないなどと回答した学生は42.1%と、前述の自ら高齢者の世話をしたいと考えている学生39.5%を2.6ポイント上回った。これらの学生が高齢者の援助について持つ印象を、回答の文面に用いられた援助に対する否定的な語句と、それらを修飾する語句から考える。

援助に対する否定的な語句として、【つらい】、【大変】、【疲れる】、【ストレスが溜まる】、【面倒

になる】、【悲しい気持ちになる】、【負担】、【嫌になる】の8語句を抽出できた。また、それらを修飾する語句のカテゴリとしては、《毎日1日中世話をすること》、《夜間の援助に伴う援助者の睡眠時間減少》、《相互理解の不足》、《援助が長期化》、《全介助を要する状態》、《援助者の自由時間の喪失》、《世話をすること》、《一人での援助》、《援助者の生活時間の確保》、《「彼女」の汚い感じ》である。

《相互理解の不足》は、コミュニケーションをどう図ればよいのか、いかに意思疎通を図るのかという戸惑いがあることが推察される。学生と患者とのコミュニケーションに関する看護教育方法として、模擬患者を利用した患者とのかかわりを体験学習させる演習などが、昨今数多く報告や研究として発表されているように、看護学生のコミュニケーション技術の未熟さが検討課題になっている。臨地実習中のカンファレンスにおいても、対象の失語症・構音障害等の言語障害や、会話の理解困難、意思表示困難などに伴い、いかにコミュニケーションを図るのか、患者のニーズを理解するのかが取り上げられることは珍しくない現状がある。事例の「彼女」に対しても同様の困難感があったのだろう。

《毎日1日中世話をすること》、《夜間の援助に伴う援助者の睡眠時間減少》、《援助が長期化》、《全介助を要する状態》、《援助者の自由時間の喪失》、《一人での援助》、《援助者の生活時間の確保》、これらのカテゴリは、学生たちが看護者として実習中あるいは勤務中に限った援助ではなく、自分自身が家族である「彼女」の世話をするというを具体的に認識した結果と考える。実際に1人で24時間接していくことにおいて、どのような援助が必要なのか、そこに自分はどのような感覚を持つのか、それらが明確になっていると推察できる。そして、具体的な認識からのイメージが、援助に対する否定的語句に結びつくのである。

《「彼女」の汚い感じ》にあるような、臭さ、汚さといった感覚は、援助について嫌だという思いがつきまとう。だからといって、この感覚は援助者にとってあるまじきことではなく、何かしらの危険や異常徴候を察知する上では必要な感覚である。また、世話ということばは、その起源から面倒との意味がある¹⁸⁾。学生が【つらい】、【大変】、【疲れる】、【ストレスが溜まる】、【面倒になる】、【負担】、【嫌になる】と「彼女」に対して思うのは、本音として当然と言える。

看護教育において、「共感」「受容」「傾聴」などの言葉が繰り返し強調される理由として、ケアリングの視点で必要であることは言うまでもない。その基本に対して「適切」な感情表現をしない学生は共感性に欠けるなどと批判される。しかし規範として不適切とされる学生の思いの中に、深い「共感」がある¹⁹⁾。「彼女」の世話に対して【つらい】、【大変】、【疲れる】、【ストレスが溜まる】、【面倒になる】、【悲しい気持ちになる】、【負担】、【嫌になる】と感ずることができたのなら、世話を受ける人が世話になりたくないと思う気持ちを共感することができる。

嫌だ、大変だと思いながらも援助する過程で、内発的に援助しなければならない、援助することが義務として実践できるのは、そこに自発的な自由意志に基づいた善意での実践よりも強い意志が働き、やめない¹⁸⁾ともいえる。従って自分の中に援助に対して嫌だという感情を持っている

ことを認識し、その自然な感情を偽るのではなくそこから援助者としての成長につなげられると考える。

4. 高齢者に対する援助行動

今回学生に示した事例の「彼女」を高齢者と推察した学生がほとんどであり、それは否定的なエイジズムによる印象への影響が考えられることは前述したとおりである。看護学生を対象とするFAQを用いた先行研究によると、エイジズムは1年生より3年生の方が否定的偏見に推移するという¹⁵⁾。一般的に否定的偏見スコアは、高齢者に対する正確な情報や知識を持つことで軽減されるが、看護学生の場合は実習によって健康障害を持つ高齢者の特徴が誇張されることで、否定的イメージが強化される。

本研究は1年生の後期にある老年看護学概論で調査していることから、今後これらの学生においても、2・3年生で実施される基礎看護学実習や老年看護学実習など様々な看護学分野の実習で健康障害を有する高齢者にかかわることで、否定的偏見が高まると容易に予測できる。このような高齢者に対する否定的な偏見やイメージは、高齢者の潜在能力を過小評価し、援助の中でますます高齢者を依存的な存在としてかかわることで自助的な援助視点を見失う。さらに否定的な高齢者観に影響を与えると、保健・医療・福祉サービスの質の低下をもたらす。これらの問題を解決する教育方法の一つとして、健康な高齢者に接する学習機会を設けることが報告されている。今回の対象学生の高齢者との同居経験状況は、看護学生を対象とした高齢者に関する複数の研究結果と比較しても標準的であることから、日常生活での高齢者の姿を身近に見ている学生も少なくない。しかし、高齢者の全人的理解を基盤とするQOL向上への支援を意図的に考えさせる機会の提供は必要である。

生来の援助行動の特徴として、愛他的な行動をとることができている学生は、老年看護の学習を深め実習で実践を重ねることで、現実を受け止めながら真の援助者としての行動を身につけて欲しいものである。一方、現段階で高齢者への援助に抵抗感を少なからず持つ学生は、自分の思いを確実に認識し、そこから被援助者に対する思いを立場の変換を行いながら理解することで援助することに興味を持つことができれば、援助者として成長することが期待できる。武井は、学生たちのちょっとした「興味」や「好奇心」、「必要とされる感覚」、「必要とされることを自分が必要としている」という自覚、自分もまた「与える人」ではなく「求める人」であるという自覚が大切だと述べる¹⁹⁾。看護倫理的な規範に対して適・不適を学生に問うのではなく、教育にかかわる者が学生の今ある姿を現実として受け止め、そこから学生個々の援助行動が価値あるものと意識できるような指導を講義・実習などの機会を通じて実施することが重要だと考える。

結 語

看護学生のエイジズム的な視点には否定的固定観念があると推察された。また、高齢者の援助について自ら実施したいと考える学生と、抵抗感を持つ学生とがほぼ同数であることが明らかになった。

老年看護学の学習過程として健康な高齢者とかかわる機会を設けることなど、高齢者の QOL 向上に向けた看護を考える学習機会や方法の検討が必要である。学生がそれぞれに高齢者の援助に対する自己認識を明確にし、そこを深め、発展させることで健康障害を有する高齢者への援助行動について学べるような指導が必要である。

引 用 文 献

- 1) 内閣府：平成 20 年度版高齢者白書，高齢化の現状，内閣府，2-73，2008
- 2) 鳥羽美香：エイジズムと社会福祉実践—専門職の高齢者観と実践への影響—，文学院大学研究紀要，7(1)，89-100，2005
- 3) アードマン・B・パルモア，鈴木研一 訳：エイジズム 高齢者差別の実相と克服の展望，序論及び基本的定義・エイジズムの諸形態，赤石書店，19-83，2002
- 4) 松尾真佐美 他：高齢者福祉施設職員の高齢者観とその関連要因，東海大学健康科学部紀要，12，15-26，2007
- 5) 古谷野亘：現代日本の高齢者観，老年精神医学雑誌，13(8)，877-882，2002
- 6) 滝川由美子 他：看護学生の高齢者イメージの変化—老年看護学概論の授業前・後の比較—，香川県立医療短期大学紀要，1，51-60，1999
- 7) 瀧断子 他：老年看護学実習前後の老年者に対するイメージの変化，東京女子大学看護学部紀要，2，35-43，1999
- 8) 渡邊裕子 他：看護学生の高齢者イメージに関する研究—老年看護学講義開始前から老年看護学実習 II 終了までの変化—，山梨県立看護大学短期大学部紀要，11(14)，159-166，2005
- 9) 中村真理子 他：老人看護実習後の高齢者イメージ—老人イメージマップの連想言語から—，東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設年報，12，18-29，2002
- 10) 鈴木みちえ 他：学年進度からみた学生が抱く老年イメージの縦断的变化に関する調査—本学における老年看護学の教授学習過程とその影響—，聖隷学園浜松衛生短期大学紀要，23，76-85，2000
- 11) 古城幸子 他：老年看護学の授業による学生の高齢者イメージの変化 第 2 報 老年看護学 II 演習の授業評価，新見公立短期大学紀要，24，25-33，2003
- 12) 兎澤恵子 他：看護大学生の連続学習による高齢者イメージ変化，群馬パース大学紀要，3，47-53，2006
- 13) 藤野洋子 他：看護学生が老年観・看護実践能力を育むための実習指導を考える 老年看護学実習での体験調査から，神奈川県立看護教育大学校，28，152-159，2003
- 14) 岩鶴早苗 他：看護学生の高齢者観育成に関する研究（第 2 報）—3 年間の縦断的にみる高齢者観の分析—，和歌山県立医科大学看護短期大学部紀要，4，37-46，2001
- 15) 小川妙子：看護学生の高齢者へのエイジズム—1 年生と 3 年生の FAQ の比較—，順天堂医療短期大学紀要，12，35-45，2001
- 16) 高木 修：人を助ける心—援助行動の社会心理学—，援助行動を研究する，サイエンス社，1-16，

1998

- 17) 池川清子, 川本隆史 編: ケアの社会倫理学—医療・看護・介護・教育をつなぐ—, 実践知としてのケアの倫理, 有斐閣, 137-158, 2005
- 18) 最首 悟, 川本隆史 編: ケアの社会倫理学—医療・看護・介護・教育をつなぐ—, ケアの淵源, 有斐閣, 225-249, 2005
- 19) 武井麻子, 川本隆史 編: ケアの社会倫理学—医療・看護・介護・教育をつなぐ—, 感情労働としてのケア, 有斐閣, 159-180, 2005